

## ドストエフスキイを読む会 報告

2025年8月9日(土)  
報告者 田尻道宏さん

参加者 10名

田尻さんは「ドストエフスキイ『罪と罰』について話し合いたいテーマ」として以下の3点を挙げた。

- 1、ラスコーリニコフはスヴィドリガイロフのような大人に出会って、対決することで自分の小ささを無意識に自覚していたのかもしれない。この小説はラスコーリニコフが酷い代償を払いながら、ラスコーリニコフ自身を救っていく物語のような面があるというのが僕の印象だ。ラスコーリニコフという若者の苦悩に迫りたい。
- 2、スヴィドリガイロフとルージンという人間が人に与える印象について。二人とも大人だと思う。しかし、ルージンは資本主義社会を生きる普通の大人に感じられるのだが、スヴィドリガイロフは、ルージンを超えた世界観を持っているように思える。スヴィドリガイロフの人物像を鮮明にしたいのだが、うまく言えない。彼をどのように捉えるのが妥当か、皆さんに問題提起したい。
- 3、スヴィドリガイロフのようなしっかりした経験に基づいた深い思想を持っている中年の男性が、20歳の女性に本当に惹かれているのだろうか。二人の関係について考察したい。

田尻さんは上記3点を提示した。これら疑問、論点をもとに2時間半余り、熱いディスカッションが展開された。議論はさらなる疑問と新たな論点を呼び込んだが、以下、順不同のまま論じられた内容を紹介する。

### 1について

- 1 ラスコーリニコフの悲劇は自分を過大評価することにある。
- 2 スヴィドリガイロフはラスコーリニコフに影響を与えることはあったのか？スヴィドリガイロフは彼独自の世界観、思想を持っていたとは思えない。
- 3 彼ら二人は世の中の対極にいる人間だと思う。ラスコーリニコフは机上の空論を実際に実行した。対するスヴィドリガイロフはそもそも悪人である。
- 4 ラスコーリニコフはアリョーナ(金貸しの老婆)を殺す必要があったのか？「踏み越える」ということなら殺人はそもそも犯す必要がない。ラスコーリニコフの理論はシラミ＝悪＝排除ということになるのか？

### 2について

- 5 ルージンという人物は論じるに足りない。
- 6 スヴィドリガイロフとルージンは世の中をうまく渡り歩く俗物という共通点がある。
- 7 19世紀半ばの当時のロシアは、資本主義が半ばだった。当時のロシア社会では、ルージンは少数派だった。だが、21世紀の今日、大半の人はお金のために動き、働く。現代人の8~9割はルージンと言ってよいのではないか。  
(ルージンについては話し合いの突込みが足らず深彫りできず残念だった。筆者)

### 3について

- 8 スヴィドリガイロフは人間味のある男性。欲しいものは手にいれたい人間で、その対象がドーニャだった。
- 9 男性としては20歳の若い女性を手に入れたい気持ちは同感だ。したがってスヴィドリガイロフはドーニャに惚れている。
- 10 スヴィドリガイロフのドーニャへの思いは、単なる性欲を超えた「愛」だと思う。

- 11 スヴイドリガイロフは地主ないしは古い価値観と慣習を持った19世紀の人間だ。対するドーニャは西洋の新しい思想(フェミニズムなど)を身につけた女性。この新しさにスヴイドリガイロフは惹かれたのだと思う。ドストエスキーも新しい思想にかぶれたスースロワに惹かれていた。
- 12 ではドーニャはスヴイドリガイロフに惹かれていなかったのか？本当にスヴイドリガイロフには世界観、思想はなかったのか？

全体を通して

- 13 罪、殺人を犯した人間には必ず良心の呵責が伴うものだ。良心の呵責にさいなまれたラスコーリニコフは、罪の呵責という罰を負った。罪を犯せば最後までもがき苦しむことになる。スヴイドリガイロフが自殺した遠因もここにあるのではないか？
- 14 ラスコーリニコフはシベリアに送られ、そこで罰を受けるなかで心の容量、心の幅が広がっていったのではないか。そのようなことから、ラスコーリニコフはシベリアに行って回心した。
- 15 「光の中に闇がある」「救いのなかに罪がある」という考えが、この小説に現れている。